



□者

宮村「」

■5 享保九年(一七二四) 縦五四・三 横一〇・七

享保九年

左神主宮村掃部頭佐伯宗直遷宮奉行  
右下宮祢宜高田役儀

祠官辻瀨平

離宮太神本社并末社四ヶ村氏子中奉上葺修理者也

榊役人祠官中村出雲守佐伯重利

辻右近自武

神事奉行高田役儀兼帶神主

辰 戊刻奉正遷宮行 酒波因幡守政信

氏子繁昌息災延命奉祈所

三月廿三日

□6 享保九年(一七二四) 縦四八・二 横一一・七

享保九年

左方大工正棟梁

御本社棟新造宮

老尺五寸上り  
内神板で張

福田七左衛門尉藤原家次

■7 寛政元年（一七八九） 縦四八・三 横一八・一

奉御上葺久世郡槇島村中

# 兔道宮修葺御上葺

山城国藤原朝臣家次

伏見上板橋檜皮大工

寛政元歲巳酉六月吉日

清左衛門

（裏面）

檜皮葺師

尾野利介

安田市右衛門

高橋長兵衛

藤城勘右衛門

板屋喜兵衛

安田源介

同 文治郎

■8 寛政元年（一七八九） 縦七〇・一 横一四・六

己 遷宮上下社家

寛政元歲

左神主宮村縫殿助佐伯宗嘉遷宮奉ル行  
右高田役儀兼帶神事奉行長者 無官辻清左衛門  
神主酒波伊勢守尚郡 同 辻七之介

# 離宮八幡本社有槇島村以離宮金奉上葺修理者也

酉

十二月十五日 酉刻奉遷宮行

榊役人中村出雲役儀名跡無之二付相勤ル  
宮村内藏助佐伯宗益  
氏子繁昌息災延命奉祈所

■9 文化九年（一八二二） 縦四三、五 横一〇、九

文化九壬申年八月 八日戌刻 下遷宮  
廿日戌中刻 正遷宮

奉上葺山王廿一社頭安全天下泰平五穀成就別所繁昌如意滿足祈所

兩遷宮之事  
菟道宮神事奉行兼神主

酒浪伊勢藤尚温（花押）  
手伝宮本主稅藤政直

（裏面）

別所之住 助十郎

吉左衛門事

源七

与兵衛

治助

久左衛門

此時当家与兵衛相勤候事

■10 明治四五年（一九二二） 縦一三六、二 横二六、二

京都府知事正三位勲壹等大森鍾一

内務部長正五位勲四等横山三郎

社寺課長從五位勲五等高崎行一

監督技師正七位 龜岡末吉

奉修理特別保護建造物宇治上神社拝殿 明治四拾五年六月拾五日

監督技師手塩野庄四郎  
現場主任技師安井樞次郎

宇治上神社々掌 宮村勇  
久世郡横島村々長山上歌吉

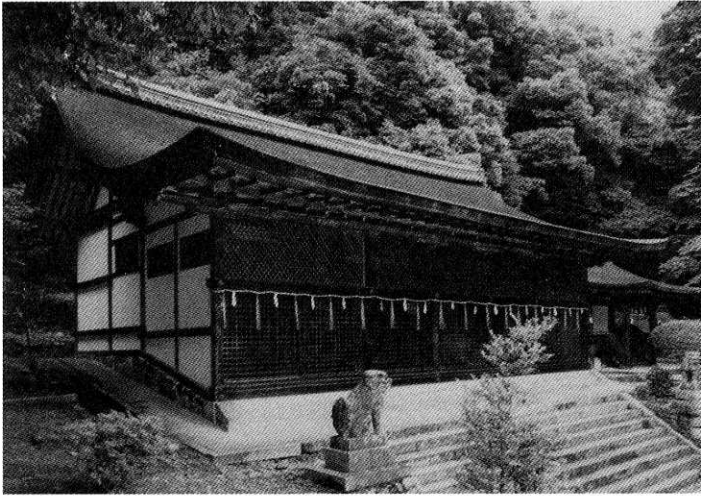
氏子總代辻久吉  
氏子總代福井建次郎  
氏子總代井内房次郎

(裏面)

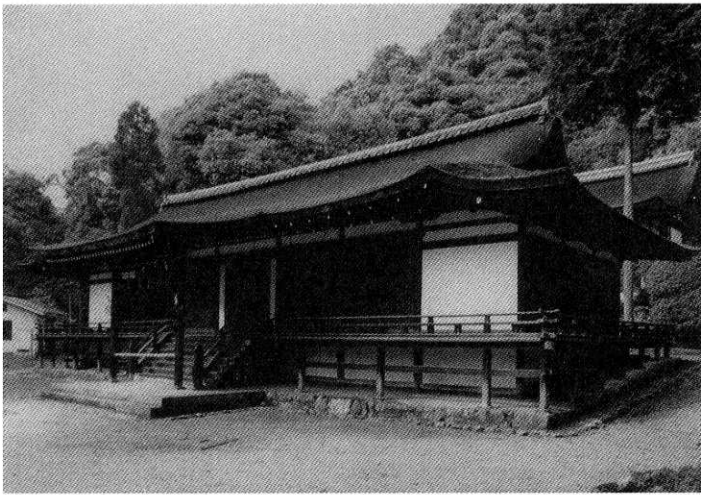
特別保護建造物宇治上神社拝殿大破ニ付総費額五千九百拾円ノ内四千七百拾円内務省古社寺保存費中ヨリ補助ヲ仰ギ  
京都府知事監督ノ下ニ明「治四拾四年九月老日工ヲ起シ四拾五年六月拾五日竣工セリ

本工事ニ使用セル主要材ハ尾張熱田大林区署ヨリ購入セリ  
檜皮葺材料ハ京都市宮川友吉ヨリ購入シ葺方ハ上加茂村岡本音七ヲシテ請負ハシム

木工 河井幸七、高木栄次郎、富沢鹿造、中山勇作、山本音吉、河井才次、染井勝、  
木挽 小山常次郎、小山大造、下岡寅吉、中島末吉、寺井米造、  
手伝 長野福松、森島亀吉、山田留吉、森島常吉、  
塗師 高沢権作



宇治上神社 本殿



宇治上神社 拝殿

## 近世・近代の地誌・紀行にみる離宮社

これまで翻刻刊行された宇治関係の地誌・紀行のうち、当館が調査・収集を終えているものについて、離宮社（宇治上神社・宇治神社）に関する記事を紹介する。

各史料は、

番号 出典 刊行あるいは著述年

著者／掲載書

本文

の順に掲げた。△内は原文では割注、（ ）内は本書編集上の注記である。なお、紀行については短文のものが大部分のため、末尾の表にまとめた。

宇治市域全体の紀行については、その概要を特別展図録『宇治名所図会』に「宇治を旅した人びと（安土・桃山時代以降）―宇治来訪者一覧―」としてまとめたので参照していただきたい。また既刊の『収蔵文書調査報告書1 「白川金色院」と恵心院』『同2 笠取地域の古文書』でも関係する地誌・紀行文を紹介している。

一 京童 明暦四年（一六五八）刊

中川喜雲／新修京都叢書一 光彩社 昭和四二年

（第四 宇治の項）

一はし姫といふは此はしづめの社也、北にあたらせ給ふ、離宮は住吉の明神なり、よなよな此はし姫にかよはせたまへるとなり

二 洛陽名所集 万治元年（一六五八）刊

山本泰順／新修京都叢書一 光彩社 昭和四二年

（卷之六）

橋姫

○此社は、橋の西のつめ也

姫の太神は、宇治玉姫とも云、離宮神、夜橋姫にかよへる時、暁ごとに波に声きこゆるとぞ、又一説に住吉明神宇治の橋守神と通ひたまふと也（後略）

離宮八幡

○此宮は宇治橋の川上、平等院の川向なり

承平年中とかや、平貞盛大將軍となり、忠文は征東將軍となり侍りて、平將門を伐誅し諸將いづれも賞褒とも有しに、忠文は藤実頼公の訴にてかひなきことなりしを、藤師輔しばしばいひなし侍れど帝ゆるしたまはずしてのち、忠文ついに憂死しけるとぞ、是なん離宮八幡なり

三 東海道名所記 万治三年（一六六〇）著

浅井了意／東洋文庫三六一 東海道名所記二 一九七九年

橋（豊後橋）を渡り小倉堤を過て左にゆけば宇治にいたる、この宇治橋八元興寺の道昭和尚のかけ給ひし所なり、ふるき書に宇治の離宮八幡の北にありといへり、いにしへの橋八社の南に有けり、十三重の石塔ある所、むかしの橋の跡也、碑の文八苔に埋もれてみえず、若楊脩

あらば摸りてよむべきや、離宮ハこれ、藤原の忠文が社也、橋の西の  
つめに橋姫の祠あり、小嶋が崎、山吹の瀬、みな爰にあり、茶をつく  
る所ハ久世の郡也、平等院、南にあり、扇の芝、釣殿、恵心院、爰に  
あり

四 扶桑京華誌 寛文五年（一六六五）刊

松野元敬／新修京都叢書二 光彩社 昭和四二年

（卷之一）

○橋姫ノ神社 在宇治橋ノ西、又名宇治ノ玉姫、相伝離宮ノ神夜通橋  
姫二、毎晓波起テ有声、一二日住吉ノ神与宇治橋守神通ス矣、未知何  
神（後略）

○宇治ノ離宮神社 在宇治橋ノ東二、号曰離宮八幡卜、藤忠文ノ之靈  
也（蓋以宇治離宮之旧趾乎）（藤原忠文故事略）

（卷之三）

○宇治神社二坐

五 日次紀事 延宝四年（一六七六）刊

黒川道祐／新修京都叢書二 光彩社 昭和四二年

（五月八日）△宇治槇島祭 近年有故用五月十五日

（五月十五日）△宇治離宮祭 始今月八日也、近世避殿有院殿之忌日  
而用今日

六 出来齋京土産 延宝五年（一六七七）刊

出来齋／新修京都叢書四 光彩社 昭和四二年

（卷之七）

○離宮

古老の伝に、山しろの国宇ぢの郡朝日山の北に離宮神あり、藤原忠文  
が靈なりといへり、（忠文故事略）今その靈は此離宮神なりといふ、  
又ある説には離宮はこれ八幡なり、されば此宮のまつりに八幡の旗を  
出せりといふ

宇治橋の北の離宮は忠文か あらそひたつるりくつ八幡 でき齋

○橋姫宮

（前略）離宮明神夜るよる橋姫に通ふ、あかつきごとに川波大きに声  
ありといへり、又ある説に住吉明神宇治の橋守の神に通ひ給ふといへ  
り、明神の歌に

夜や寒き衣やうすきたかそきの 行あひのまに霜や置らん  
とよみ給ひけると也（後略）

七 京師巡覽集 延宝七年（一六七九）刊

僧文愚／新修京都叢書四 光彩社 昭和四二年

（卷之七）

○橋姫 自橋爪南久世郡也

（前略）サレバ宇治ノ玉姫ハ離宮ノ神ニシタハレテ波ノヨルヨル通ヒ  
玉フ、サムシロニ衣カタシキコヨヒモヤ、我ヲ待ラン宇治ノハシ姫卜  
イヘルハ離宮ノ詠ニテ、夜毎ニイタリケルトゾ、争力尾生ガ約ナラン  
ヤ、アル説ニハ住吉ノ明神コヽニカヨヒ玉フトモ云（後略）

○離宮明神

（藤原忠文故事略）後諡離宮明神、故九泉間有喜云、或人曰、兎道雅

郎子へ仁徳之弟、住玉宇治故曰宇治宮、崩後曰離宮明神（後略）

八 菟芸泥赴 貞享元年（一六八四）刊

北村季吟／新修京都叢書五 光彩社 昭和四三年

（第四上）

○橋姫明神（前略）

一 顕昭云、うぢのはしひめとは姫大明神とて宇治の橋下におはする神を申にや、其神のもとへ離宮と申神の夜ごとにかよひ給ふとて、其帰り給ふ時しるしとて晝ごとに宇治川の波のおひたゞしく立音のするとぞ申伝へたり（後略）

○離宮

平等院の鎮守也、川上にさす、祭所神菟道稚郎子、宇治離宮二所有、一所は此社也、袖中抄等に橋姫にかよひ給ふよしいへるは是なるべし、今一所は河東に有、忠文の霊を祭といふ

○離宮

河より東恵心院の南にあり、平等院の鎮守の離宮と別也、或説曰、（藤原忠文故事略）其忠文の霊を此離宮には祭とぞ

一 五月八日宇治祭にとて離宮の神事とぞ

一 続古事談曰、隆綱は才智ありけれども心ばへすこしあとなかりけり、雑色のこはき装束して晴渡るを世にうらやましき事にいひて、宇治の離宮の祭に雑色の装束を一具まうけて卿相の床下につきたりけるが、俄に立て片方によりてはたと装束して馬長の供にかちにてゆゆしくねりてわたりたりければ、もとより見めよき人にて有ければ見物の者とも是を見て、ゆゆしき雑色哉といひののしれども見しる人なし、をの

づからにゆゆしく宰相中将殿に似たる者かなといふものありけれども、あまりおもひよらぬ事なればいくほどなくして事過にけり、このもしき事は悲しく見へけり

九 京羽二重 貞享二年（一六八五）刊

孤松子／新修京都叢書六 光彩社 昭和四三年

（卷二 年中行事の項）

（五月）八日 宇治祭

（卷三 神社）

○離宮 山城国宇治里

此御神は藤原の忠文霊を勧請せり、俗に八幡宮と云、此宮の祭に八幡の旗を出せりと

別当 長茶宗味

○姫大明神 同所宇治橋詰向

此社橋姫と号す、亦宇治の玉姫とも云り、離宮の神夜る橋姫にかよふ時川浪大きに声ありと云云

一〇 雍州府志 貞享三年（一六八六）刊

黒川道祐／新修京都叢書三 光彩社 昭和四三年

（二）神社門上 延喜式の項）

宇治神社二座へ歟）

（三）神社門下 宇治郡）

○離宮 在宇治、伝言所祭藤原忠文也、然謬伝乎、按（菟道稚郎子故事略）、毎年五月十五日有祭、奉金銀幣、祭日供奉人誤有金銀幣、謂



義牟賀利々々々々

(五) 寺院門下 久世郡)

○平等院 (前略) 伝言、応神天皇皇子菟道王、宇治里予知弘法興隆之靈地、而川上構離宮、則今当寺鎮守離宮是也(後略)

(九) 古蹟門下 宇治郡)

●宇治宮城 万葉集有額田王菟道之宮借舎之歌、然則菟道稚郎子之宮乎、今不詳其処也、恐宇治川東離宮之所在乎

一一 京羽二重織留大全 元禄二年(一六八九)

孤松子/新修京都叢書六 光彩社 昭和四三年

(大全卷之一 四季行事)

○五月 八日 ▲宇治まつり

(卷之二 古宮城)

○宇治宮城 万葉集に額田王菟道の宮借舎の歌あり、しかるときは菟道の稚郎子の宮か、稚郎子は応神天皇の季子にして宇治の皇子と申奉る、其所未さだかならず、おそらくは宇治川のひがし離宮のいます所ならんか

(卷之三 謬伝)

○金銀幣 宇治に離宮の社あり、伝云藤原の忠文をまつる所也、毎年五月十五日神事あり、金銀の御幣を捧奉る、祭の日供奉の諸人金銀の幣ありと云を伝へあやまり、ぎんかりぎんかりと申侍る

一二 山城名勝志 正徳元年(一七一)刊

大島武好/新修京都叢書八 光彩社 昭和四三年

(卷第十七)

○橋姫社 へ坐宇治橋西南、号姫大明神、六月十日祭之

(前略) 頭住密勘、宇治の橋姫とは姫大明神として宇治の橋の下におはする神也、その御許へ宇治橋の北におはする離宮と申神夜毎に通ひ給ふとて晝毎におひたたく浪のたつ音のするとなん、彼辺に侍る土民等申侍し、而降縁伯耆と申歌詠は住吉明神の宇治の橋姫と申その神の許へ通ひ給ふ間の歌なりへ袖中抄同之(後略)

○離宮明神 へ○宇治橋北二座、五月八日祭之、○按皇極天皇宇治離宮之地、祭此神乎、故称離宮明神乎

諸社根元記云、旧記云、此神者麿太子云云、又忠文民部卿、二人為彼地主

位記 治曆三年十月七日正三位

扶桑略記云、治曆三年十月五日庚戌、天皇車駕幸臨宇治平等院、七日

壬子離宮明神授其位記

百練抄云、治曆三年十月七日還幸、離宮明神授一階

盛衰記云、へ民部卿へ忠文ヲ神ト祝奉宇治二離宮明神ト申八是也

兵範記云、仁平三年四月十五日、去八日離宮神輿迎以後平等院三綱以下田楽為本散楽為先風流云云、村々競営毎日出立、先參神輿旅所次參

入道殿御所

又云保元二年五月八日壬申宇治離宮祭、不被奉幣乘尻神馬等、依亮暗年也

○宇治神社 へ神名帳云、宇治郡宇治神社二座、土人云、今離宮祭日辰刻警蹕神輿渡也、三室戸・古道・彼方三郷民役之、離宮未社三室戸

村二座大鳳寺村一座祭之、是云宇治神社二座彼方神社一座乎

一三 山州名跡志 正徳元年（一七一二）刊

釈白慧／新修京都叢書一九 光彩社 昭和四二年

（卷之十五）

○離宮八幡 在橋寺南二町許、鳥居へ西向木柱、拝殿へ向午未、宮へ同、所祭八幡三所へ同石清水

○若宮 在同所東山下、鳥居へ同上、拝殿へ同、所祭若宮、是誉田天皇御子菟道稚郎子也、称若宮

平等院縁起曰、離宮有川上、応神天皇王子菟道尊、是則当寺鎮守神也云云、宇治御子八天皇第五御子也、帝位ヲ讓玉ヘルニ辞シテ宇治山二閑居シ位ヲ御舎兄大鷦鷯皇子ニ讓玉ヘリ、是モ亦何ゾ君勅ヲ虚クシテ即位スベキニアラズト辞シ玉ヒ、天子ナキコト三年、遂ニ宇治御子自ラ薨ズ、依テ兄親王即位シ玉ヘリ、仁徳帝是也

○離宮号 或説ニ、此地ハ上古菟道親王御所ナリ、故号離宮、当宮ヲ以造此地、呼地名号之云云、山崎ニ有同名宮、於彼所リキウト称ス、於此所リクウト称ス、自然名目也、右ニ所宮相殿撰社アリトイヘトモ社記不分明、於中有伝記アリトイヘトモ略之

○一説曰、此地ノ傍ニ藤原忠文方山荘アリ、忠文没後ニ彼靈ヲ此地ニ祭り鎮ム、今号大宮是也云云

例祭 五月十五日、土人為産沙神

忠文靈 出源平盛衰記、（故事略）宇治ニ離宮明神ト申ハ是也（後略）

○投社 在離宮鳥居北一町許、鳥居へ南向木柱、小社へ西向、傍有榎老木、所祭忠文靈云云、鎮在記社号不詳

一四 都名所車 正徳四年（一七二四）

著者未詳／新修京都叢書九 光彩社 昭和四三年

○橋姫此神へ離宮の神夜かよひ給ひしとき川なみ大きに声あり、○離宮の社は藤原忠文の靈なり

（都年中行事の項）

（五月）八日 宇治祭

一五 五畿内志 享保二二年（一七二七）著

関祖衛・並河永など／大日本地誌大系一八 雄山閣 昭和四年

（巻第七 山城国之七 神廟の項）

宇治神社二座 へ鉄鞆、○宇治馬場町、称離宮、有上下二座、各有拝殿・神楽所、小祠十余前、祝司神官五家、日本紀曰、菟道稚郎子興宮於菟道、而居之、因曰宇治都、即此又見風土記、扶桑略記曰、治曆三年十月五日庚戌天皇臨幸宇治平等院、奉授離宮明神位記、仁平三年四月八日祭祀離宮明神、田楽為本、散楽為先、諸村競宮風流、見兵範記

一六 山城名跡巡行志 宝曆四年（一七五四）

淨慧／新修京都叢書一〇 光彩社 昭和四三年

（第六 宇治郡三）

○宇治神社二座 在橋寺南二町計、一社称離宮八幡、鳥居、拝殿、社へ俱向午未、所祭応神天皇、○一社称若宮、在離宮後一町東山下、鳥居、拝殿、社へ俱向午未、所祭菟道稚郎子へ応神天皇皇子也、此所菟道皇子御所也、依号離宮、○小祠十余所、○神人五家 例祭五